

Title	就任にあたって
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53261
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

就任にあたって

藤田 治彦

意匠学会会長就任にあたり、『デザイン理論』の誌面を借りて、会員の皆さまにご挨拶申し上げます。本学会は1959年の創設以来、45年の長きにわたり、デザインに関する学術研究の推進を目的として、さまざまな活動を行ってきました。定期的で開催される研究例会は2005年2月に開催された京都女子大学における会で182回を迎えました。1研究あたり約1時間の発表を行ない、さらに懇談の席を設けて、じっくり意見交換等を行なうというかたちは現在も保たれ、本学会の活動の基本となっています。また、1962年以来刊行されている学会誌『デザイン理論』は、近年一層充実した内容となり、研究例会、大会とともに、意匠学会の重要な柱となっています。これらはすべて、井島勉、河本敦夫、伊東一信、金田民夫、上平貢、宮島久雄の諸先生と、それら歴代会長を支えてこられた諸先輩の努力と相互理解・協力の賜物であり、それを会員の皆さまとともに継承することは、大いなる喜びであると同時に、このデザイン分野のコミュニティにおける一つの責務であることはいまでもありません。

決して良いとはいええない社会状況・経済状態にもかかわらず、デザイン活動は引き続き盛んに行なわれ、デザインへの興味は一層高まっていると言えるでしょう。「デザインの時代」というのは新しいようで古い言葉です。1960年代にそのような言われ方がされて以来、70年代も、80年代も、90年代も、そして21世紀を迎えた今日も、その時代は続いているようです。あるいは、その新しい時代に入った、というべきかもしれません。東アジア諸国はもちろん、スペイン語圏諸国などもその時代を迎え、世界の大半がデザインの時代に入るといって、1960-70年代とは違う世界状況に私たちがいることは確かです。とはいえ、それらの諸国では、デザインに目ざとい一部の人々がそのような状況をつくりだしているだけで、ほとんどの人々は、それにただ受け身で接している、あるいは、いつのまにかデザインに巻き込まれているだけ、というのが現実でしょう。そういう私たちの国の状況も、実際には大同小異であることはいまでもありません。

景気がよければデザインの需用は大きく、不景気なら不景気なりにデザインへの期待は高まります。デザイン系を目指す若者の数が減少するようには思えません。このように斯界は順風満帆の状況にあるようですが、繁栄の陰に、いつのまにか、一種の虚無感が広がってはいないでしょうか。パソコン、携帯電話、大画面高画質テレビの普及など、大きなものから小さなものまで、私たちを取り巻く世界の視覚情報は増大を続けています。視覚芸術、視覚造形、あるいは視覚設計、これはデザイン本来の意味と領域であり、結構なことと思われるかもしれませ

ん。しかし、一例を挙げるなら、毎日眼にするテレビやパソコンのディスプレイに現れる、けばけばしい色と無神経な配色や文字の使用等には眼を覆いたいと思うことがあります。私たちが歩んできた45年のあいだに、テクノロジーは高度に発展したが、デザインのレベルはまったく向上しなかった、あるいは、むしろ低下した、とって過言ではないかもしれません。デザインの向上とされているものの多くは、製造技術の向上や、デザインと製造のスピードアップ、あるいは流行追従速度アップに過ぎないように思われます。

もちろん、いまでは、デザインという概念は、色やかたちを超えた、より広義の意味でも用いられています。ものにあふれた現在、とりわけ日本では、眼に見えないデザインの重要性は多くの人の認識するところでしょう。しかし、現在、表面的な色やかたちは意外にも、あるいは結果的に、軽視されているのに対して、内容は充実しているかという点、そうではありません。日本に住む私たちだけではなく、いま、デザインの時代を迎えた国々の人々の多くがそう感じつつあるのです。必要物あるいは進歩として追求されているもののいかに多くが、いわゆる先進国の単なる流行に過ぎないことか。生活様式や社会制度などの眼に見えないデザインについても、同様のことが言えるでしょう。欧米主導のデザインとその研究を導入したあとで気付くのが、自分の文化にあるデザインや、かつてあったデザインなのです。

意匠学会は、そのようなデザインだけでなく、伝統的な意匠にも等しく眼を向けてきました。それは本学会がこれまで基盤としてきた場所や文化、その学問的伝統と深く関わっています。とはいえ、私たちは、その陥穽にも気付いています。伝統は大切にすべきですが、それに寄りかかってしまえば、発展は望めません。もっと現代に——流行にではなく——目を向けるべきでしょう。より広い世界に——西洋に・アジアに・といった意味ではなく——眼を向けるべきでしょう。大切なものを守りながらも、より広い地平に立つ意匠学会を会員の皆さまとともに目指したいと思えます。

デザイン研究は本当により望ましい方向へと進んでいるのでしょうか。興味本位の研究対象ではないか、本当に有意義なデザインの研究とはどういうものか、そういったことを、常に会員の一人一人が意識しているような学会であればと思います。意匠学会はゆっくりと着実に発展してきた学会です。いいものを大切にする学会、時に流されない学会であればと思います。とくに若い世代の積極的な参加を期待します。